



Book Talk

編集・発行 海南高校図書部
第16号 2012. 11. 14

藤田先生(社会科) 読書 = 清涼剤なのだ

ここ数年でのボクのベスト小説は金城一紀の『映画篇』(だと思いこんでいる)。読み終わって、あったかーい気分にもまれた。この本のオビに書かれていたのは「現実よ物語の力にひれふせ」。確かに物語がもつ力に感服した。

ボクにとっての読書(小説)は、ふだんの生活に清涼感をもたらすもの。だから、「ああ読んでよかったなあ」という気持ちにさせてくれるものでなければ意味がない。ってことで、「なんでや!」と本に向かって叫びたいようなものは読まない。映画もそうなのだけど、登場人物に「よかったね」と思わず声をかけたいような終わり方をするものしか読まないことにしている。



いちばん最近読んだ本は、宮部みゆきの『ソロモンの偽証』という約700ページ*3巻という長い小説。ある中学生の自殺をめぐる学校内で裁判を開くというお話。著者久々の現代ミステリーで一気に読み終えた。その宮部みゆきはボクの好きな作家の5本指に入る人。文章が上手いし、読んだ後、「よかったなあ」と

思えるストーリーのものが多いから。だから、宮部作品は、ファンタジーを除いてすべて読んでいる。初めて読んだのは確か『レベル7』だったのだけど、すぐに魅了されて、それは現在まで続いている。

とにかく最近読む本は、「ミステリー」という範疇にはいるものがほとんど。そして、ボクの読書スタイルは、とにかくある作者にはまるとしばらくはその人の本ばかり読む。ここ数年の中ではまったのは、たとえば、池井戸潤。

『空飛ぶタイヤ』『鉄の骨』『下町ロケット』などがよく知られているけど、元々銀行員だった彼の作品は、前歴を生かした内容の作品が多い。「弱きを助け強きに立ち向かっていく」という内容が大好きだ。それから、警察小説にはまって(それはいまでも続いているのだけど)、今野敏、佐々木譲の本は立て続けに40~50冊ぐらい読んだ(警察小説じゃないものも。『とせい』『任侠学園』などの任侠シリーズもお気に入り)。

それから、東野圭吾の本もかなり読んだ。でも、トリックとかの構成は上手いけど、あんまり文章は上手じゃないなあとボクは感じてるから(ひょっとしたらわざとそんなに書いてるのかな?)、好きな作家というわけでもない。



とにかく、その時々評判になっている本は、本屋に行くとは一度は手にとってみる。だけど、パラパラとめくって「うーん、これはなあ」と感じるものはすぐ元に戻す。だから(?)、村上春樹の本をボクはまったく読んだことがない。なんというか、自分のなかの「うっ!」という気持ちを乗り越えてまで読もうという思いにはなっていない。逆に、評判になっていて、手にとってすぐに読んだものもある。この夏に一気に読破した「みをつくし料理帖シリーズ」

(「この時代劇がすごい」第1位)もそう。うん、あんな人情物がやっぱり好きだ。

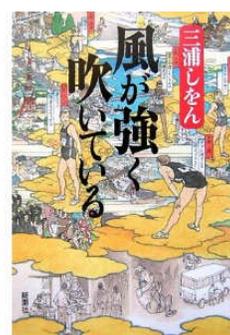


さて、他にも印象に残っている本がけっこうある。なかでも、あの脚本家・倉本總の『谷は眠っていた』。もう閉じてしまったけど、彼は二十数年にわたって、私財を投じて「富良野塾」というシナリオライターや役者を育てる塾をやっていた。この本は、その初期の頃のことを書き綴ったノンフィクション。登場する塾生たちの生きざまに感動した。それが醒めぬまま、ボクは、塾生たちが演ずる芝居(『谷は眠っていた』『ニングル』等々)をわざわざ大阪や東京にまで観に行った。そして、その迫りに圧倒された。



倉本總に絡んだちょっとおまけの話。「北の国から」(倉本總が脚本を書いたテレビドラマ。COWCOWのネタのあの「純」が出てくる)のロケ地を富良野を訪ねたときのこと。町はずれにある麓郷(市街地から20kmほどある)からの帰りにバス停で時間を

見ていると、すぐそばのスーパー(といっても、雑貨屋兼八百屋って感じ)のおばあちゃんが「もうバスないよ。おにいちゃん(ボクのこと)、どこまで行くんだい?」「えー、もうないんですか?富良野に戻るんですけど」と言うと、「ちょっと待ってな。孫に送らせるから」ということで、ボクはお孫さんに富良野まで送ってもらうことになった。その道すがら、「すみません。ありがとうございました」と言うと、お孫さんは「うちのおばあちゃん、いつもあんな感じです。ボクはもう何人も



乗せてます。気にしないでください」・うーん、おばあちゃんもおばあちゃんだけど、孫も孫。倉本總には、『北の人名録』という本があるのだけど、その本の世界が見事にそこにあった。和歌山に帰ってから、お礼にミカンを送ったら、なんと富良野メロンが返送されてきた。

最後に、お気に入りの本を思いつままに並べて終わろう。

浅田次郎も好きな作家。主人公が亡くなったりするのはちょっと嫌なんだけど、人情味あふれるドラマは涙を誘う。なかでも好きなのは、『シェエラザード』『終わらざる夏』。それからぜんぜん雰囲気はちがうけど『きんぴか』とか『プリズンホテル』のシリーズも好きだ。あの『阪急電車』の有川浩の『三匹のおっさん』も大好きな本。重松清も一時やたらと読んだ。『いとしのヒナゴン』とか『きみの友だち』『くちぶえ番長』なんかいいなあ。あっそうそう。三浦しをんの『風が強く吹いている』『神去なあなあ日常』もよかったなあ。

ということで、いま読んでいるのは、横山秀夫の久々の新作「64」。また警察小説。

なんか、ただ単に作品を並べただけになったけど、その気になったらここにあげた本を読んで下さいな。でも、「なーんや」と思っても、決してボクには言わないように。(社会科 藤田雅敏)

「よかったなあ」と幸せ気分
そんな本が読みたい